

平成29年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- |     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| I   | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び   |
| II  | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成           |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築        |
| IV  | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V   | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成      |

道府県・政令市名【 千葉県 】

1 実践テーマ	【 III V 】
2 実施対象者	学校名 千葉県立桜が丘特別支援学校 対象 全児童生徒 人数 169名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 ( 体育 ) ② 行事名 ( ) ③ その他 ( ) (2) 地域における活動 ① イベント名 ( ) ② その他 ( )
4 目標 (ねらい)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリンピック・パラリンピックへの興味関心、理解を深める。</li> <li>・授業で取り組んでいる競技を通して、選手と身近にかかわる機会を通して、競技や身体を動かすこと、競技を見ることへの興味関心の幅を広げる。</li> <li>・障害をもつ方からの話を聞くことで、少しでも卒業後、将来の生活を考えるきっかけ、身近に感じるきっかけづくりにつなげる。</li> </ul>
5 取組内容	<p>○高等部A課程の生徒を対象に、体育の授業で取り組んでいるウィルチェアラグビーの講師を招いて交流授業を行う。</p> <p>○講師は、千葉市にあるウィルチェアラグビーのチーム「RIZE CHIBA」から坂井泰司選手、山口徹朗選手の2名の選手。</p> <p>&lt;事前&gt;                  体育の授業を通して、ウィルチェアラグビーの競技に取り組んでいる。全体ではルールを確認したり、チームではポジションや作戦を考えたりしながら実際に競技に取り組みながら進めている。ルールは、生徒の実態の幅が広い為、正式なルールを基本に、桜が丘オリジナルのルールに工夫し、生徒一人一人がより取り組みやすいようにしている。</p> <p>&lt;当日&gt;                  選手から競技についての説明やウィルチェアラグビーの特徴であるタックルのデモンストレーション、競技用車いすに乗りタックルの実技体験、そして選手との交流試合を行った。実際に本物のプレーや用具（競技用車いす）を使用することで、競技に対してより身近に感じ、興味を示している生徒が多く見られていた。中には自分から選手に話しかけたり、積極的に試合の中でも動いたりしていた生徒もしていた。選手と生徒が競技を通して互いに充実した交流</p>

の時間となった。終了後には、「もっとやりたい」「ウィルチェアラグビーって楽しい」など感想が多くの生徒から挙げられていた。



<事後>

交流についての生徒から感想を聞き、授業の中では試合や動き方など、生徒の実態に応じて取り入れていく。

<p>6 主な成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に本物のプレーを見たり、競技用車椅子でプレーをしたりすることで、より競技に対しての興味・関心が広がったり深まったりした。</li> <li>・競技だけではなく、社会に出て生活をする、働くという視点での考え方についても考えるきっかけ、身近に感じるきっかけをつくる機会となった。</li> </ul>
<p>7 実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義中心ではなく、質疑応答なども含めて選手とかかわる時間や選手のプレーを目の前で観る時間、競技用車椅子への試乗や実際に一緒にプレーをするなど、生徒と選手がより身近に感じられる時間を多く設定するようにした。</li> </ul>
<p>8 主な課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外部の方に来ていただく機会となると、日程調整が難しい場合も考えられる。できれば、児童生徒のことを考えると、授業単元の時期と同じ時期を考えていきたい。(スポーツ競技の場合、相手方の都合や大会の時期などによって難しい場合も考えられる。)</li> <li>・より多くの児童生徒へ広げていきたいと考えていると同時に、一人一人に身近に感じられる取り組みにしたいと思うと、一回に交流できる人数が限られてくる場合がある。目的、やり方、回数の検討も必要になってくる。</li> </ul>
<p>9 来年度以降の実施予定</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度と同様、実際に競技を行っている選手を招き、身近に、そして直接かかわることのできる機会をつくる実践ができればと考えている。</li> </ul>

